

博士学位論文審査要旨

2019年1月7日

論文題目： デューイにおける成長と教育の民主主義的基底——コミュニケーションによる社会的経験の共有と多元性をめぐって——

学位申請者： 阿部 康平

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 新 茂之

副査： 同志社女子大学大学院国際社会システム研究科 教授 加賀 裕郎

副査： 岡山大学大学院教育学研究科 准教授 宮崎 宏志

要 旨：

本論文のねらいは、古典的なプラグマティズムの一つの到達点を示したジョン・デューイの唱道する成長と教育の民主主義的基底を浮きぼりにするところにある。

本論文は、まず、デューイに従って、経験を成立させる二つの柱、すなわち、相互作用の原理と連続の原理に着眼する。経験は、有機体と環境との相互的作用に依って生起する結びつきの関係である。しかも、有機体は、経験と経験とのあいだに累積的な連続性をも構築する。本論文が明らかにしているように、デューイは、経験の恒常的な再組織化として教育を捕捉する。有機体と環境とのコミュニケーションを通して経験の累積的な連続的展開が起り、デューイにあつては、そのような営みは優れて教育的であるのである。このような観点から、本論文は、デューイの言うコミュニケーションをつぎのように理解する。すなわち、それは、ひとびとがある活動に参画して他の参加者とともみずからの経験の意味を学ぶための営みである、と。

本論文は、想像の働きにも注目する。コミュニケーションの参加者たちは、たがいの経験を想像的に享受しそれぞれの経験を独自に発展させて、経験の接触を惹きおこしながら、相互の連带的関係を強化していく。ここにコミュニケーションの教育的意義がある。しかも、コミュニケーションを介してひとびとは結びつきあい、そうした結び目に多様な社会が生まれる。デューイは、このような社会を成立させるための要件として、ひとびとの共有する興味の多様性と、ほかの連合との自由な接触を挙げる。本論文が証示しているように、社会のなかで、ひとびとは、コミュニケーションに依って、一定の方向で協力し、たがいの経験を想像的に分かちあいながら、それぞれの経験を再構築して、螺旋的に共同を作りあげていく。ひとびとの、このようなありかたこそ、デューイの提起する民主主義であり、教育がそのねらいと定める成長の内実であるのである。

本論文の主題は、これまでの研究者たちが扱ってきた問題である。本論文の、それらにたいする批判的検討には、不十分なところもありはする。しかし、上述のように、本論文の考究は、デューイの考えかたの中核となる民主主義の哲学を明晰にしている。よって、本論文は、博士（哲学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2019年1月7日

論文題目： デューイにおける成長と教育の民主主義的基底——コミュニケーションによる社会的経験の共有と多元性をめぐって——

学位申請者： 阿部 康平

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 新 茂之

副査： 同志社女子大学大学院国際社会システム研究科 教授 加賀 裕郎

副査： 岡山大学大学院教育学研究科 准教授 宮崎 宏志

要 旨：

上記審査委員3名は、2019年1月7日、午後0時30分から約2時間にわたり、徳照館1階会議室において、学位申請者にたいして口頭試問を行なった。

学位申請者は、各審査委員からの質疑にたいして、提出論文にかんする哲学の専門的な知識はもとより、教育学を始め、関連する諸分野の主題とか問題とかについても、的確かつ詳細な応答を行なった。その結果、本論文の学術的価値と学力の水準の高さがともに証明された。

口頭試問のまえに実施した語学（英語・独語）試験においても、十分な語学力を備えていることが確認された。

よって、本論文にかんする総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： デューイにおける成長と教育の民主主義的基底—コミュニケーションによる社会的経験の共有と多元性をめぐって—

氏名： 阿部 康平

要旨：

本論では、デューイ (John Dewey, 1859-1952) の言う「コミュニケーション」(communication) が産出する教育の動態を析出させ、社会の多元的な展開の実相を剔抉して、「生き方としての民主主義」の道具主義的基底を闡明したい。

デューイは、「哲学的な思考のもっと染み込んでいる誤りは、脈絡の無視に遡る」(LW 6: 5, 1931-1932) と述べ、哲学が看過してきた「脈絡」にいつその注意を向けようとする。ギャヴィン (W. J. Gavin) は、デューイの立場を「脈絡主義」として同定し、デューイの著作の読み方も現代の視点から改めて問い直す必要性があると指摘する。すなわち、ギャヴィンが重視するのは、デューイの「文献(text)が新たな千年紀にある現代の脈絡(context)とどのように関係するのかわを露わにする取り組み」である。ギャヴィンに準拠して言えば、わたしたちは、現代的な脈絡のなかで、デューイをどのように理解しその考え方をどのように活かすのか、デューイの提起している視座の脈絡主義的な把握を明確にしなければならない。

ギャヴィンは、デューイ研究の動向を三つの立場に分類する。まずひとつは、「デューイを通過することに性急であるべきではない」というデューイの考え方を固守しようとする立場である。ギャヴィンにしたがえば、ローゼンタール (Sandra Rosenthal)、マーゴリス (Joseph Margolis)、ラックス (John Lachs) がここに位置する。第二の立場は、「デューイの脈絡主義は、根本的に変更されるものではなくて、いつ修正される必要はありながらも、無傷のままである」という見解を取る。ギャヴィン自身は、みずからをこのような立場に位置づけており、他にも、キャンベル (James Campbell)、エルドリッジ (Michel Eldridge)、パッパス (Gregory Pappas) を挙げている。我が国での研究者で言えば、斎藤直子は、ここに位置付けられる。というのも、斎藤は、『内なる光と教育—プラグマティズムの再構築—』のなかで、「デューイの民主主義と教育の思想構造を内在的に批判し新たな可能性を開く」という目的を果たすために、「エマソンの道徳的完成主義」と対話させるという手法を取っているからである。

このような考え方をいつそう先鋭化させていく立場として、ギャヴィンは、次のような見解を紹介する。それは、「デューイが新たな千年紀に関わることになるのであれば、デューイの著作は際立った改定を必要とする」と訴え、デューイの思想の問題点を積極的に浮き彫りにしようとする研究である。ここにいるのは、ボイスヴァート (Raymond D. Boisvert)、アレキサンダー (Thomas M. Alexander)、サリヴァン (Shannon Sullivan) である。ギャヴィンの分類を採用すれば、近年わが国でもシティズンシップの教育で注目を集めているピースタは、第三の立場を取る。ピースタ (Gert Biesta) は、デューイの道具主義的な考え方に民主主義の教育の不可能性を見て取っている。ピースタは、プラグマティズム、とりわけデューイの研究者でもあるけれども、その立ち位置に踏みとどまらない。すなわち、ピースタは、「ハンナ・アレント、イマニュエル・レヴィナス、ミシェル・フーコー、ジムグント・バウマン」といった、ポスト・モダンの思想家たちの洞察を踏まえて、デューイの道具主義の難点を炙り出し、それを克服しようと努めている。ピースタは、民主主義の教育を考察するうえで、「民主主義的な教育の道具主義的考え方」、すなわち、「教育が民主主義を生じさせるための道具と見なされる」ような発想に異議を申し立てている。しかしながら、他方で、ピースタは、デューイのプラグマティズムを十分理解し、それを高く評価している。ピースタは、こう述べている。「デューイが、科学のもつ狭い合理性にいまだに取りつかれている世界のなかであって、もっとも効果的な解毒剤と「紛れもなく人間的であることすべて」を開拓するための最も効果的な方法を提供している」。ピースタが評価するのは、科学と社会の分断を統合する道筋をデューイのプラグマティズムが用意した点である。とはいえ、ピー

スタは、デューイの視座に踏みとどまらない。たとえば、ピースタは、民主主義の教育にかんして、アレントの洞察、とくに多元性という考え方に依拠して、デューイのプラグマティズム、すなわち、道具主義が根本的な問題を孕んでいることを描き出そうとしている。

デューイの道具主義をめぐってピースタが提出している理解に疑問の余地があるけれども、かれの着眼のすべてを否定することはできない。というのも、ピースタは、教育を「ある一定のすでに決定された諸結果を生じさせるために働かせられる道具」とする動向に、疑義を提示しているからである。ピースタが問題を提起する背景には、「西洋的な教育についての顕著な事柄のひとつ」である「教育と学校教育への技術的な期待」にたいする疑念がある。すなわち、ピースタは、「教育は一定の前もって決定されている諸目的を生じさせるために使用できるという考え」にたいして危機感を抱いている。というのも、そうした考え方がもたらすのは、学校にある困難を取り除くための、教育の「正しい方法」があるという想定である。しかし、ピースタは、そうした仮定に反対する。たとえば、「多元性という事実」は、教育に困難をもたらすけれども、ピースタは、それを解消すべきではないと主張する。ピースタにあっては、多元性を保持した状況こそ、「社会の民主的な性質の改善」には欠かせない。というのも、ピースタが要請する民主主義は、「すべてのひとそれぞれが主体であるための好機を持つところの状況」であり、ひとびとが相互の異質性を示し合うことで実現するからである。したがって、ピースタに依って言えば、互いの共通理解が容易に達成できないような事態は、教育的な技術を改良して克服すべき課題ではなく、むしろ、その事実を認めることこそ、民主主義を実現するための地平を開いていけるのである。

このように、ピースタは、民主主義を成立させる基盤として多元性に着目している。ピースタの見立てにしたがえば、道具主義は、そのような多元性を排除しようとする。というのも、ピースタの言う道具主義は、多元性を教育の困難と見なし、それを解消するための技術の改良を用意する考え方であるからである。しかし、ピースタの論難は、的を射ているのであろうか。道具主義というデューイの立場は、ピースタが確保しようとする多元性を民主主義から押し出してしまおうのであろうか。本研究の目的は、こうした現代的な問題に対して、デューイ自身の文献に依拠して道具主義の内実を肉薄して、ピースタらの論考が看取できていない、デューイの民主主義の核心を抉り出すところにある。

そこで本論は、第一章で、デューイの教育論の主題である経験の概念について、その動態の構造を洗い出し、成長の可能的な要件を確認する。デューイにしたがえば、教育は、相互作用の原理と連続の原理という二つの柱によって成り立つ。両者に通底する連続の概念の意義をそれぞれ明確にし、経験が再構成していくための基本的な要件を明らかにする。すなわち、有機体と環境という観点から経験の再構成の内実を露わにする。そのうえで、第二章では、その経験の再構成の動態を、社会の未成熟者と成熟者との関係から捉えなおす。別言すれば、個人が直接的な経験を通して得た知識が他の個人との共有するための方途を究明する。デューイは、教育の一般的機能として社会的な経験の世代間での継承を要請する。その共有の機構は、共同的活動という観点から析出できる。しかし、共同的活動は、直接的経験に依拠した知識の共有に留まる。それでは、実際に経験していない事柄についての知識は、いかにして共有できるのか。第三章では、学習者が、直接的経験から間接的経験の展開へと至る道筋をコミュニケーションという観点から明らかにする。しかし、デューイのいう教育は、個々の行為者に固有の経験の展開を可能にしなければならない。それゆえ、なぜコミュニケーションが経験の同質的な共有を目指しながらその多様な展開を可能にするのか、という課題を想像という概念に照準を定めて解明する。この考察を踏まえて、デューイが捕捉する社会が、なぜ多元的な形態を持つのかを解明する。デューイの社会概念は、善悪さまざまな社会を内包している。すると、そのような種々の社会の内部で、いかにして、道徳とか倫理とかを問題にできるのかがつぎの課題になる。第四章では、デューイの道徳論が相対主義に陥るといふ多くの研究者の論難、とりわけ、ケアリング論の代表者であるネル・ノディングズ(Nel Noddings)からの問題提起にたいして、デューイの「責任」(responsibility)という概念の分析から応答を試みる。そのうえで、デューイが指向するコミュニケーションによる道徳的成長と社会の連続的な更新がどのように符合していくのかを解明する。デューイにあっては、教育の目的は成長そのものであり、その外部にはいかなる目的も設定してはならない。デューイが描こうとした教育と民主主義との関係性を捉えようとすれば、ピースタが捉えているよう

な目的と手段の単純な二項対立を退け、それらの関係を進行していく経験の位置に応じて相対的に捉えなければならない。しかし、デューイは、一方で、民主主義を社会の理想的な形態として掲げている。デューイにあってこの理想は、どのように教育のなかで位置づけなければならないのであろうか。この問題を解くために、「ねらい」(aim)という概念に着眼する。というのも、デューイの言うねらいは、単なる目的ではなく、活動の条件を準備していくその過程そのものを含意しているからである。こうした論考によって、デューイの言う教育と民主主義と成長の三位一体的な展開を明らかにし、経験の共有と多元性の確保という現代的な教育の課題を克服していく理路を明示する。